

国語 問題

(一) つぎの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「言文一致」という言説のシステムの模索期において、二葉亭四迷や山田美妙に三遊亭円朝の『怪談牡丹灯笼』を初めとする速記本が意識されていたことは、あまりにも有名だ。話している言葉をそのまま文章にしたというその速記術については、あまり言及されることが多くないが、それまでの日本にはなかったその言語転写技術は、日本語を音声の体系に一元化するという大きな変革を内包していた。漢字と仮名をまじえた日本語に、音声だけで立ち向かう。田鎖綱紀や若林珣蔵らは、音声の差異を表示する記号体系を創出し、同音異義語などについてはさらに別の記号で使い分け、「傍聴筆記術」を実用化していった。つまり速記が文字化されていく過程では、話された言葉がいったん記号に翻訳され、その記号の翻訳をへて、あらためて読みうる文章が綴られることになる。当然その二重の翻訳過程においては、発話の場面での言いまちがいや繰り返し、よどみやもつれが整理され、新たな文章化がおこなわれているわけだが、あたかも実際に当人が発話しているかのような錯覚を起こすことで、言葉のメディアとしての独立性は消去されてしまう。

その速記術が「ことばの写真」という比喩で呼ばれていたのは、きわめて暗示的である。伝達媒体としてのメディアを越えて、それ自体で多様な意味を生み出しうる記号としての力を発揮するものが写真であるとするならば、むしろ写真に関する言説が写真自体の官能的で多産的な魅力と可能性を抑圧してきたのが、明治以後であった。言文一致を生み出していくケイキ^Aとなった速記術にしても、その翻訳過程を意識の外に追い出して、実際の発話をそのままおさえる技術ととらえられたところに、のちのリアリズム概念にいたる誤謬^{ごびやう}の萌芽があった。

近代が生んだもう一つのテクノロジーである写真は、やがて書物の内部に侵入してくる。ひとつには写真そのものが書物に挿入されて印刷される。そしてまた写真をめぐるしぐさやふるまいがテキストのなかでの言及対象になるのだ。さまざまな侵入者のなかで、とりわけ重要な役割を果たしたのが、肖像写真である。とりあえず写真一般を作家の肖像に限定して考えるならば、写真は読者に対して、手渡された言葉のテキストを最終的に統括する人間の存在を視覚的に確認するよう方向づけ、さらに身体的部位のうち顔を突出させた意味発生装置となっている。

書かれたテキストとその著者の顔が等号で結ばれ、一对のセットとして想定されて、顔の浮かばないことが読者の不安やコウキ心^Bをかきたてもする。むしろその顔は化学的な映像処理と撮影、編集、印刷の何重にもわたる微分積分作業をへたうえで作り出されたイメージにすぎない。だが、こうした写真を見ることに慣らされた側の要求は、作家たちに読者の、また出版社の要求に応えた

国語 問題

身振りを強いることにもなる。写真に写ることを自己の全存在をかけた身体パフォーマンスとして意識することをもはや作家の自意識として組み込んでいかざるをえなくなったのが、現在である。私たちはその典型として*一九七〇年に割腹自殺した一人の作家を知っているはずだ。写真を撮る／撮られる、見る／見られる関係のなかに成立する視線の交錯を写真空間と呼ぶならば、こうした写真空間の成立と文学テキストの変容はどのようにあつづけることができるのか。

私たちはまず日本で生活している誰もが関わらざるをえない*紙幣に印刷された肖像写真の人物が書いたテキストを覗いてみることにする。すなわち¹夏目漱石の『硝子戸の中』^{ウチ}である。

『硝子戸の中』（『東京朝日新聞』大4・1・13〜2・23）の二には、ある雑誌社の男が「私」の写真撮りたいと依頼してくる挿話がある。「わざとらしく笑つてゐる顔」の多いその雑誌に不快感を覚えていた「私」は、「当り前の顔」で撮ることを約束させて来訪を許した。しかし、写真機を携えてやって来た男はその場になると、約束ではあるが、笑つてくれと頼んだ。呆れた「私」は取り合わず、そのまま押し通したのだが、後に郵送されてきた写真は注文通り笑つた顔になつていた。

修整写真を見て愕然^{がくぜん}とした「私」は次のような感慨を抱く。「私は生れてから今日迄に、人の前で笑ひたくもないのに笑つて見せた経験が何度となくある。その偽りが今此写真師のために復讐を受けたのかも知れない」。そして「気味のよくない苦笑」を浮かべた写真は届いたが、それが掲載された雑誌はついに送られて来なかった。

雑誌ジャーナリズムの軽薄に対する嫌厭^{けんえん}の情をもらしたかのようなこの挿話は、しかし肖像写真をめぐつてさまざまな示唆をなげかけている。ひとつには肖像写真とは社会的に流通する記号であるということだ。ここでは笑っている著名人の顔こそが雑誌の基本コンセプトであり、それが読者にもたらす効果に主眼は置かれている。その記号作用の有効化に向けて被写体は演出される。しかし肖像写真の記号性はこの場合だけでなく、一般においても妥当する。撮影者は自分をも含めて写真を見る者のまなざしを無意識に想定しているはずだからだ。

いまひとつは写真とはトリミングにほかならないということである。作られた笑いは写真が一定の光学的器械と化学的処理による作成物にすぎないことをよく示している。修整を施していない肖像写真であつたとしても、「これが私だ」ということを視覚的に認識させるが、ある差異の感覚をいつまでも残す。私なのだが、私でないというもどかしさ。写真は差異と同一性の循環構造のなかに人々を招くのだ。

真を写すという言葉の意味とはうらはらに、結果的に写真が表現しているのは²写された者と写

国語 問題

した者とのまなざしの関係自体であり、社会的文化的に規定された関係の複合体であった。『硝子戸の中』の「私」が見入った写真は、雑誌社のまなざしによってデフォルメされ記号化された自分であった。過去に人前で「笑ひたくもないのに笑って見せた経験」は、特定の他者との関係のなかでのみ成立していたが、ここで印刷された写真は不特定多数の匿名の大衆へ向けて流通する。永遠に自己を疎外しつづける《笑ふ漱石》という記号が大衆のなかへ走り去っていくのである。

だが、その「私」が世界に対峙しているのも「硝子戸」という四角いレンズを通してにはかならない。硝子／レンズを媒介しながら記号と反記号の森を歩く「私」の苦さはひととおりではないだろう。もちろん七十年後の現在、彼の写真が記号以外のなものでもない紙幣に印刷されている事態は、あまりにも皮肉ではあるけれども。

(紅野謙介『書物の近代』より)

【注】 *一九七〇年に割腹自殺した一人の作家

三島由紀夫(一九二五～七〇年)。晩年にナショナリズムの復興を説き、一九七〇年十一月二十

五日、自衛隊市ヶ谷駐屯地で演説を行ったあと

割腹自殺した。写真集も出版している。

一九八四～二〇〇七年に発行された千円札には、夏目漱石の肖像が印刷されていた。

*紙幣に印刷された肖像写真

問一 波線部A・Bのカタカナを漢字に直して書きなさい。

問二 傍線部1「夏目漱石」の著した小説をつぎの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 地獄変 イ 夢十夜 ウ 山椒魚 エ 金閣寺 オ 春琴抄

問三 傍線部2「写された者と写した者とのまなざしの関係自体であり、社会的文化的に規定された関係の複合体」とあるが、それはどのようなものか。三十字以上、四十字以内で説明しなさい。ただし、句読点や記号も一字と数える。

(下書き用)

| | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |

40 30

国語 問題

問四 本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 二葉亭四迷や山田美妙は傍聴筆記術を実用化していった。
- イ 田鎖綱紀や若林珮蔵は言文一致の文体を作り出した。
- ウ 速記術は言文一致を生み出していきつかけとなった。
- エ 夏目漱石の笑った顔の写真は雑誌に掲載されなかった。
- オ 夏目漱石は雑誌ジャーナリズムの発展に貢献した。

(二) つぎの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

京極殿まじやうごくどのに、上東門院かみとうもんいんのおはしましける時、南面に、花の盛りなりけるに、日隠ひかくしの間の程ほどに、けだかく、神さびたる声にて、「*こぼれて匂ふ花桜かな」とながめける声を、聞きこし召して、いかなる人のあるぞとて、御覧ごらんじけれど、いかにも、人のけしきもなかりければ、Xおぢ思し召して、Y宇治殿うぢどのに、急ぎ語り参らせ給ひたりければ、「*そこのくせに、常じょうにながめ侍るぞ」と申させ給ひける。されば、ものの霊など、めでたき歌と思ひそめて、常にながむらむは、まことに、よき歌なめり。思へば、わづかに、拾遺抄ばかりには入いりたんめり。異物ことものには見えず。世の人も、Zさまざまも、思おもひたらざめり。されば、なほ知らぬ事なめり。

(『俊頼髓脳』より)

【注】 *上東門院

藤原彰子(九八八〜一〇七四年)。藤原道長の長女。一条天皇の後。

*こぼれて匂ふ

『拾遺和歌抄』や『拾遺和歌集』に載る「浅緑野辺の霞は包めども

こぼれて匂ふ花桜かな」の下の句。

*宇治殿

藤原頼通(九九二〜一〇七四年)。藤原道長の長男。

*そこのくせに

その場所での決まりのように。

問一 傍線部X「おぢ思し召して」を、主語がわかるように現代語訳しなさい。

問二 傍線部Y「常にながめ侍るぞ」を現代語訳しなさい。

問三 傍線部Z「さまざまも、思ひたらざめり。」とはどういうことか、わかりやすく説明しなさい。

国語 問題

(三) つぎの文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、返り点や送りがなを省略した箇所がある)

楚^ニ有^リ養^キ由^キ基^{トイフ}者^一、善^ク射^ル者也。去^{ルコト}柳^一葉^一百^ニ步^一而^レ射^ル之^ヲ、百^モ發^シ而^レ百^ク中^ク之^ニ。左^ニ右^ニ觀^ル者^一数^ニ千^一人、皆^ク曰^ク、善^ク射^ル。有^リ一^ニ夫^一立^チ其^ノ旁^一、曰^ク、

善^シ、可^{シト}教^フ射^ヲ矣。養^ニ由^キ基^一怒^リ积^{オチ}弓^ヲ、搯^ニ劍^一曰^ク、客^ニ安^ク能^ク教^フ我^ニ射^ル乎^一。

客^ク曰^ク、非^ニ吾^一能^ク教^フ子^ニ支^ヘ左^{カガムル}詘^一右^ヲ也。夫^{ソレ}去^{ルコト}柳^一葉^一百^ニ步^一而^レ射^ル之^ヲ、

百^{タビ}發^{シテ}而^レ百^{タビ}中^{ツルモ}之^ニ、不^レ以^テ善^ク息^{ヤメ}、少^シ焉^{シテ}。氣^ニ衰^ヘ力^一倦^{ウミ}、弓^ニ撥^{ソリ}矢^一鉤^{カガマリ}、

一^ニ發^シ不^レ中^ク者^一、百^{タビ}發^シ尽^ス息^一。

(『史記』より)

【注】 *養由基

楚の人。弓の名手であった。

*支左詘右

左手で弓を支え、右ひじを曲げて矢をつがえるということ。

*鉤

曲がつて飛んで。

*尽

ことごとく。

問一 傍線部A「客安能教我射乎」を、書き下し文にしなさい。なお、歴史的かな遣いでも現代かな遣いでも、どちらでもよい。

問二 傍線部B「非」の読みを、送りがなも含めて、ひらがなで答えなさい。

問三 傍線部C「一發不中者、百發尽息。」とはどういうことか、わかりやすく説明しなさい。

国語 問題

(四) つぎのA～Eの中からテーマを1つ選び、具体例を挙げながら、考えを述べなさい。

- A 文学や芸術を解釈するとき、作者の存在をどこまで考慮すべきか、するべきでないか。作者名や作品名を挙げながら、考えを述べなさい。
- イ 有名だがあまり読まれていない文学作品を自由に改変してテレビドラマ化したら、何をどのようにアレンジするか。企画案を述べなさい。
- ウ 日本文学や日本語や日本文化などの魅力を海外の人に紹介する雑誌を編集するとしたら、どのような内容にするか。企画案を述べなさい。
- エ 時代とともに言葉は変容してゆくが、それにもなつて国語辞典や英和辞典はどのように更新されてゆくべきか。考えを述べなさい。